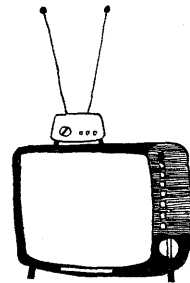


映像メディアとどいつきあうか

向田久美子



現代の社会は、目まぐるしい勢いで変化を遂げています。中でも、情報技術の発展は著しく、子どもを取り巻く世界を大きく変えました。今、生まれてくる子どもたちは、さまざまな電子メディア——テレビ、ビデオ、携帯電話、パソコン、テレビゲームなど——に囲まれながら育ちます。親世代もテレビやテレビゲームに親しみながら育った世代ですが、当時と比べると、ハード面においてもソフト面においても格段に選択肢が広がったと言えるでしょう。このような変化に伴い、テレビやテレビゲームなどの映像メディアが子どもの心身に悪影響を及ぼし

ているのではないか、という懸念も強まってきています。小児科医は長時間映像メディアに接触している子どもにも、言葉の遅れなどが見られることを指摘していますし、視聴時間の長さが注意の欠陥や多動傾向と関連しているという知見も見出されています（ただし、因果関係については、まだはつきりしたことはわかっていません）。こうしたことから、米小児科学会は一九九八年に「二歳未満の子どもにはテレビを見せるべきではない」という勧告を出しました。日本小児科学会も二〇〇四年に「乳幼児のテレビ・ビデオ長時間視聴は危険です」という勧告

特集

を発表しています。これだけ聞くと、子どもにテレビを見せてよいのかと不安に思われる方もいらっしゃるでしょう。

ここではテレビを中心に、最近の研究動向を紹介したいと思います。まず、接触時間について見てみましょう。多くの調査が、乳幼児期の子どものは一日約三時間、テレビ画面に接していることを明らかにしています。もちろん、「ながら視聴」も含まれますが、この三時間という数字は、遊びに費やす時間とほぼ同じになっています。大半の子どもが〇歳から視聴を開始し、一歳ごろには歌や体操をまねたり、画面を指して親に同意を求めたりするようになり、二歳前後になると、一人でスイッチ操作をし、家族とテレビの話題を楽しむなど「一人前の視聴者」に成長するとされています。

テレビゲーム利用も携帯用ゲームの普及などによ

り、低年齢化が進んでおり、三歳児の一〇二割が使用していることがわかっています。最も多い使用時間は一時間前後で、女子よりも男子の使用が多いということです。しかし、全体で平均すると、幼児期のテレビゲーム利用は一日あたり数分、一〇分程度にすぎません。テレビに比べて個人差が大きいメディアと言えるでしょう。

子どものテレビ視聴やテレビゲーム利用には、家庭環境が少なからず影響しているようです。母親がテレビ好きでよく見る場合、子どもの視聴時間も長くなります。一方、「食事中には消す」という習慣をもっている家庭では、子どもの視聴は減る傾向にあります。ゲームの使用に関しては、母親よりも年長の兄弟や父親の影響のほうが大きいようです。

さて、こうした早期からのテレビ視聴は、子どもの知的・情緒的・社会的発達にどのような影響を及

はずのでしょうか。これまでの知見をまとめると、質の良いテレビ番組を一定時間視聴することは、子どもの知的能力や社会性に良い影響をもたらしますが、暴力的な番組の視聴や長時間に及ぶ視聴は子どもの攻撃性や不安感情を高め、発達上の問題を引き起こす可能性があると言えます。とりわけ、最もよく研究されているのが攻撃性との関連で、暴力的な映像が攻撃行動を促進するという知見は繰り返し確認されています。特に、テレビゲームの場合は攻撃に主体的に参加すると同時に、暴力を振るうことで報酬がもたらされるといった点で、より影響が深刻だとみなされています。

また、集中力が持続しにくい子どもの注意を引くために、子ども向け番組はさまざまな工夫を凝らしています。たとえば、子ども（の声）や人形を登場させる、カットや編集により展開を速くする、音響

効果を利用する、などです。しかしながら、過度にペースを速くしたり、知覚刺激を多用したりすると、内容理解が妨げられるだけでなく、子どもの注意集中能力や自制心が損なわれる可能性もあるということです。以上のことからすると、テレビやテレビゲームそのものというよりも、どのような内容のものをどれだけ利用するかが問題だと言えるでしょう。

では、私たちはテレビやテレビゲームとどのように向き合っていけばよいのでしょうか。はじめに、これらの良い点について考えてみましょう。映像メディアは、鮮やかな色、音声、動き、お話によって、私たちを楽しませてくれます。いろいろな知識ばかりでなく、感動体験をもたらしてくれることもあります。子どもとの会話や遊びに活かすこともできるでしょう。

特集

一方、問題点について考えてみましょう。最もよく挙げられるのが、視力の低下や運動不足といった身体面への影響です。心理的な面への影響としては、映像メディアが応答性や双方向性に乏しく、視覚中心の限られた経験しか生まないことが問題になります。乳幼児の心身の健全な発達には、五感をフルに使った体験や人との相互作用が欠かせません。これらの体験を通して、子どもは自分自身、他者、そして社会への手応えや信頼感を獲得していくのです。テレビやテレビゲームに触れること自体は悪くなくても、結果としてそのような体験の機会が奪われてしまうと、子どもの発達によくない影響を与えてしまう可能性があります。

また、暴力的な映像が多いことも問題点の一つです。映像メディアは「見て、まねて、覚える」という観察学習の対象になります。三歳を過ぎるころに

は、テレビに登場するキャラクターへの同一視や模倣も盛んに見られるようになります。キャラクターになりきっている子どもの姿はほほ笑ましいものですが、幼児期は善悪の判断や現実と空想の区別がまだ充分についていません。そのため、親をはじめとする身近な大人が「媒介」する必要があるのです。「媒介」とは、子どもと一緒にテレビを見ながら、感想や意見を言い合うことを指しています。

残念ながら、子どもと一緒にテレビを見たり、話し合ったりするよりも、テレビを子守り代わりに利用している家庭も少なくないようです。そうせざるを得ないときがあるにしても、親は子どもがどのような番組に接しているかを把握しておく必要があるでしょう。そして、暴力的な映像や刺激過多な番組はなるべく避けたほうがよいでしょう。

幼児期は、食事や排泄などの基本的な生活習慣を身

につける時期でもあります。メディアが生活環境の重要な一部となり、また生涯をメディアと共に過ごす時代にあつては、幼児期（それ以降もですが）の発達課題の一つに「健全なメディア習慣の育成」を加えるとよいのではないかと思われます。最初は親が時間や内容を選ぶ必要がありますが、徐々に子ども自身でメディアに接する時間や内容をコントロールできるようなるとよいと思ひます。

こうした習慣に加え、子ども自身に批判力や判断力がつくようにすることも、これからは重要になってくるでしょう。この力のことを「メディア・リテラシー」といひます。メディアから送り出されてくる情報をうのみにするのではなく、批判的に読み解く力、そして各メディアの特質を理解し、その特質に応じて利用する力が「メディア・リテラシー」です。現代はインターネットの時代です。いくら「有

害番組」を規制したところで、親の知らない間にいくらでも情報が取り込めてしまうのです。そのような時代にあつては、幼児期から少しずつ「メディア・リテラシー」を身につけられるよう援助していく必要があるでしょう。それには、「媒介」による、信頼できる大人の言葉が大きな役割を果たすことでしょう。

また、子育て環境全般を見直すことも必要だと思われます。各地で行われている子育て支援活動では、乳幼児を抱えている親が家庭にこもらなくてむような環境を整えたり、子どもに生身の世界の楽しさを伝えたりする努力をしています。一人ひとりの子どもがメディアの賢い使い手になれるよう、親による働きかけはもちろんのこと、社会全体で子ども（と親）を支え、見守っていききたいものです。

（清泉女学院大学）